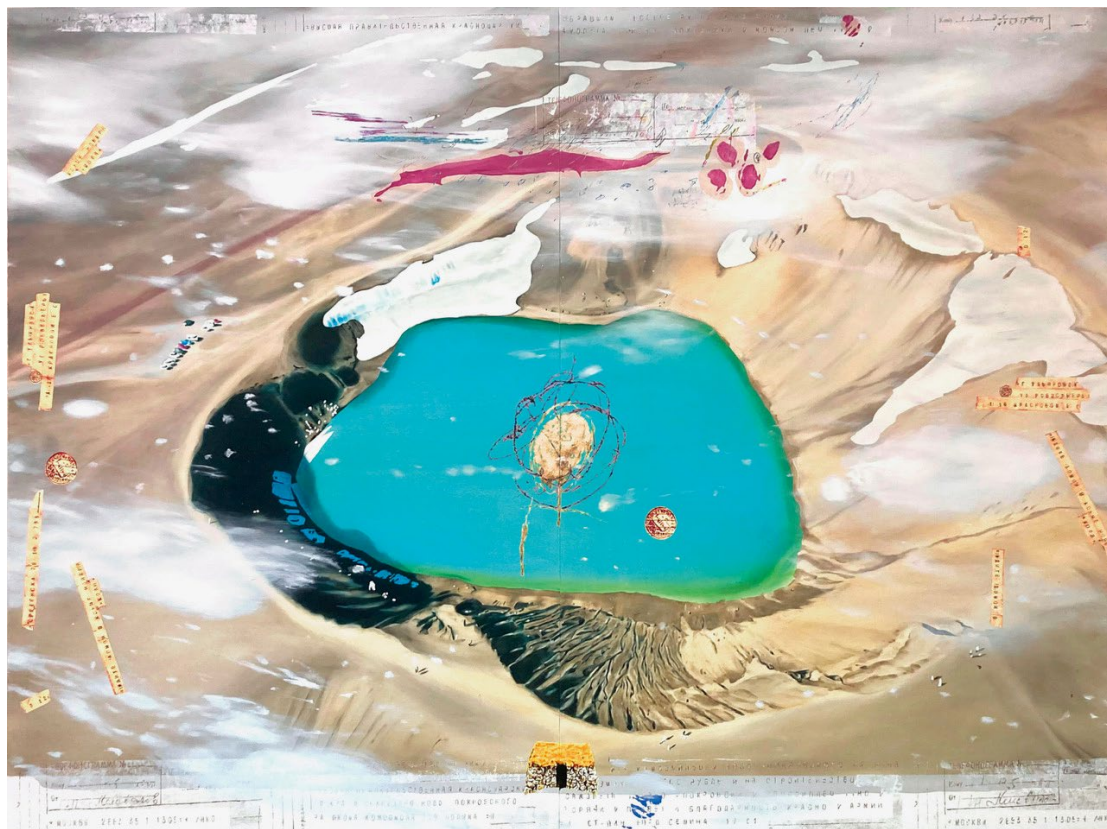


名古屋 文化 情報

2026
Summer

No.418
NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery / ケンジタキギャラリー
随想 / 地歌・箏曲演奏家 岡崎美奈江さん
この人と… / 劇作家・演出家・劇団ジャブジャブサーキット代表 はせ ひろいちさん
視点 / 独創性豊かな演奏家たち
#zoom up / 歌人 小坂井大輔さん



2026

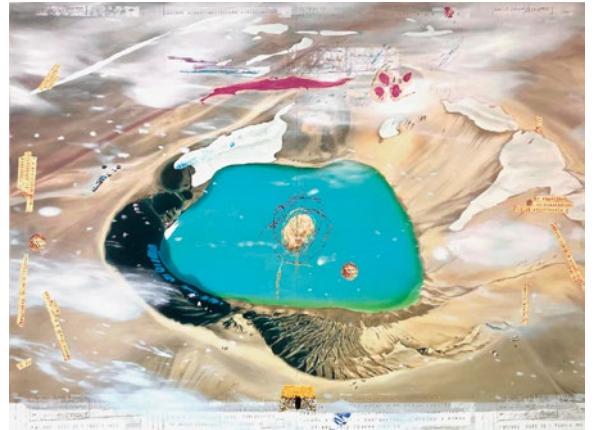
Summer

表紙

「Cloud Thickness」

(2025年/H194×W260×D3cm/パネルにアクリル絵の具)

「Cloud Thickness」は、第二次世界大戦で戦場の現実を語ることなく老いていった女性兵士たちの存在を起点としている。雲の厚みで見えなくなった事実を、絵画を通して表現している。



しばた まい
柴田麻衣

2002年 名古屋芸術大学大学院美術研究科同時代表現研究修了
2013年 「VOCA展2013」VOCA奨励賞受賞
2026年 令和7年度名古屋市芸術奨励賞受賞
その他、東京・大阪・愛知など個展多数

Contents

Pick Up Gallery ケンジタキギャラリー …………… 2

随想 地歌・箏曲演奏家 岡崎美奈江さん …………… 3

この人と… 劇作家・演出家・劇団ジャブジャブサーキット代表
はせひろいちさん …………… 4

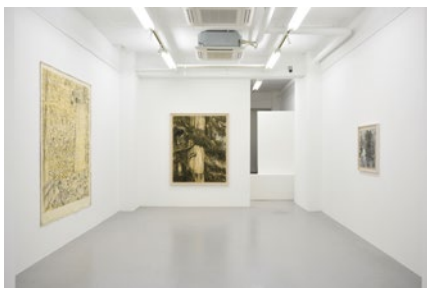
視点 独創性豊かな演奏家たち …………… 8

#zoom up 歌人 小坂井大輔さん…………… 10

「なごや文化情報」編集委員

- 大寺資二 (舞踊家・大寺資二バレエアカデミー主宰)
- 黒田杏子 (ON READING)
- 小塚憲二 (作曲家・編曲家)
- 設楽 陸 (アーティスト)
- 常磐津綱鵬 (常磐津奏者)
- 望月勝美 (編集者・ライター)

Pick Up Gallery



吉本作次「続・絵画の道行き」展
(2025年12月6日 - 2026年2月28日)

ケンジタキギャラリー

1994年、名古屋にて開廊。1998年に西新宿、2024年に六本木にスペースを開設。

開廊以降、名古屋と東京の両スペースにて、絵画や彫刻、立体、インスタレーションなど国内外で活躍するアーティストの新作個展を中心に企画展を開催している。

同じビル内に隣接するギャラリー顕美子は、同オーナーで、1992年に刈谷市にて開廊、1997年に名古屋に移転。現代陶芸を中心に企画展を開催し、独創的で真摯な制作活動を続ける現代の作家たちを継続的に紹介している。

設立 1994年 オーナー 滝 顕治
住所 〒460-0008 名古屋市中区栄3丁目20-25
電話 052-264-7747

取り扱い作家 村岡三郎、若林奮、戸谷成雄、杉戸洋、塩田千春、イケムラレイコ、アルフレドジャー、ヴォルフガング・ライブほか
ウェブサイト <https://www.kenjitaki.com>

随想

名古屋での出会い



地歌・箏曲演奏家

おかざき みなえ
岡崎美奈江

名古屋音楽大学邦楽専攻卒業・同大学院修了。名古屋市民芸術祭2012で市民芸術祭特別賞（箏・三絃リサイタル）、名古屋市民芸術祭2025で市民芸術祭賞（なごや古典らいぶ）受賞。
 現在、名古屋音楽大学講師、生田流箏曲宮城社大師範、箏曲美卯の会主宰。東京生まれ。

私が名古屋の地に嫁ぎ30年以上が過ぎました。自分では名古屋人だと思えるほど馴染んでいるつもりです。

「芸どころ名古屋」、このフレーズを聞いたことはありましたが、幼少からピアノを習っていた私には、当時はあまりピンと来ませんでした。

お箏を始めたのは、名古屋に来て間もない頃でした。きっかけは、名古屋に誰も知り合いない私に、義母が、何か習い事でもしたらと勧めてくれたことです。習うなら音楽系がいいなと考えていたところ、義母の実家で、昔義母が姉妹で演奏していたという古い箏に出会いました。

素晴らしい師匠たちと出会えたことは、人生が変わったと言ってもいいほどのとても幸運なことでした。また、社会人入試制度を導入したばかりの名古屋音楽大学邦楽専攻への入学は、様々な分野の先生方と出会い、学びの多い大切な6年間でした。

音大卒業後の活動のひとつとして、地歌をもっと演奏したい、いろいろな方に聴いていただきたいとの思いで企画したのが、「なごや古典らいぶ」の演奏活動です。

同じ卒業生の絃方（箏・三絃）3名と地元の三流派（都山流、琴古流、竹保流）の尺八演奏家の先生方3名にご賛同いただき、伝統芸能であるお琴（箏）や三味線（三絃）は敷居が高いな、

退屈かなと思っていらっしゃる方にも気楽に聴いていただけるよう、小さめの空間で、分かりやすい解説を加えた演奏会を毎年開催してきました。

第10回の記念演奏会は名古屋能楽堂での開催を目標にした矢先、新型コロナウイルス感染拡大により足踏みをしてしまいましたが、2025年秋には無事に開催することができました。

その「第10回なごや古典らいぶ」は名古屋市民芸術祭2025に参加し、市民芸術祭賞を受賞いたしました。これも、これまでご指導くださいました諸先生方、ご支援してくださいました皆様のお陰と感謝しております。

昨今、古典芸能や古典音楽は大変厳しい状況にあると思います。ただ、さすが「芸どころ名古屋」だなと思うのは、たくさんのシニア層の方が「子どもの頃に使った当時の箏が家にあるので、もう一度演奏したい」と習いに来てくださることです。また、その方々がお孫さんやひ孫さんを連れて来てくださることもあり、現在は5歳から80歳代の方を指導させていただいております。義母の古い箏との出会いは、この名古屋で多くの方との出会いをくれました。

時代時代を大切に弾き継がれてきた伝統楽器「箏」、伝統音楽でもある「地歌・箏曲」を次の時代に引き継いでゆく一人となれるよう、これからも精進して参ります。

この人と...



劇作家・演出家・劇団ジャブジャブサーキット代表

はせ ひろいちさん

40年の節目を迎え、自由で豊かな作品創りへシフト

観客の想像力を喚起するミステリー仕立ての作品で人気を博す劇団ジャブジャブサーキット。その劇作と演出を手掛ける代表のはせひろいちさんは、現代社会を照射した巧みな会話劇のスタイルによって、大人の知的好奇心をくすぐる作品を創り続けている稀有な存在だ。本拠地は岐阜だが、1990年代以降は名古屋を軸に全国各地でも公演を行い、いつしか当地を代表する劇団のひとつに。そして昨年、劇団創立40周年を迎えたのを機に、昨年末から今年初めにかけて三重・東京・

大阪を巡った第64回公演《夜の横顔》をもって、30年に及んだツアー公演に終止符を打った。ひとつの節目を迎え、新たな航路へと舵を切ったはせさんと劇団の軌跡、そしてこれからについて伺った。（聞き手：望月勝美）

〈邪楽〉〈NO SIDE〉を経て、
〈劇団ジャブジャブサーキット〉誕生

「演劇がとにかく嫌いだった」というのはせさんが、なぜか小劇場の世界へ足を踏み入れ、自ら劇団まで立ち上げるようになったのは1985年のこと。岐阜大学OBを中心に結成した当初の劇団名は〈NO SIDE〉だったが、旗揚げから4年後の'89年、一定の成果を上げた岐阜での活動から、腕試しの決意で名古屋の劇場「七ツ寺共同スタジオ」へ進出するのを機に、〈劇団ジャブジャブサーキット〉（以下ジャブジャブ）へと改名した。

演劇とは無縁だったはずの人生が大きく転換したのは、大学入学前に遡る。浪人時代、予備校の授業をエスケープし、たむろしていた喫茶店で男女混合の気の合う仲間ができ、ミニコミ誌作りなどをしていたという。

「詩や論評を書いたりいろいろしながら、それが結構楽しくて。つまり、10人ぐらいのユニットが出来ちゃってたんですね。それで大学はみんな地方に散らばるわけだけど、せっかく出来た仲間だし、幸い大学生は夏休みなんかも長いし、『このメンバーで何かやろう』ってことになったんですよ。それで、その中に高校時代から演劇をやってるヤツがいて、『バンドでもいいし映画撮るのもいいし、俺は何で

もいいと思うんだ。でもさ、演劇ってわりと低予算で始められるんだよ、どうだ?』って唆されて。今から思うと完全にヤツの術中にハマった（笑）」と、はせさん。

こうして、大学の枠を超えた集団〈邪楽〉を結成。「演劇が始まってしまった（笑）」。さらに、「お前、ミニコミ誌とかでいっぱい書いてたし、文章上手いから戯曲書け」と先の友人に後押しされ、当初から役者と劇作も担当することに。上演場所を提供してくださる方との幸運な出会いなどもあり、地元で5回ほど公演を重ねたが、〈邪楽〉は大学4年の夏で解散。卒業後は岐阜日日新聞社（現・岐阜新聞社）に就職し、演劇も卒業、のつもりだったが…。

「後を引くことはわかってたから、中型の免許を取って400ccのバイクを買ったり、当時流行りそうだったウインドサーフィンも始めて、演劇から全速力で逃げ切ろうと、いろいろな趣味を始めたんです」。

しかし、演劇の魔力には抗えなかった。

「既に〈邪楽〉を始めてたから、大学では演劇研究会に入るのはシャクだな、と思って映画研究会に入ったんですよ。でも、当時の岐阜大の演劇研究会はわりと中心メンバーがしっかりしてたり、いい芝居をいっぱいやってたので観に行ったりして交流はあって、お互いの芝居を観合いなが

ら、牽制し合いながら、という関係でした。そういう演劇研究会のOBOGたちと'84年の年の瀬に一緒に麻雀をやってみて、疲れて終わって飲んでるうちに、『劇団でもやりますか』っていうことに(笑)。

この団結から〈NO SIDE〉が生まれた。やがてジャブジャブに改名し、名古屋進出を果たした頃、芝居と仕事の両立が難しくなったはせさんは、新聞社を円満退社。「芝居だけで生きていこう」と決意する。



〈NO SIDE〉時代の舞台写真。この頃は役者としても活躍

“ミステリー好き”の原点

さて、そんなはせさんが描く作品といえば、冒頭でも触れたとおり「ミステリー」の要素が大きな特色のひとつになっているが、そうした志向性は幼少期に既に確立されていたようだ。

大正2年生まれの父と昭和2年生まれの母の一粒種として、昭和35(1960)年に岐阜市で生を受けたはせさんは、いわゆる堅い家庭環境で育ったという。テレビ鑑賞が許されたのは主にNHKの番組。当時放映されていた《タイムトラベラー》(原作は筒井康隆の《時をかける少女》)や、《刑事コロンボ》などの、SFや犯罪ミステリーシリーズに夢中になった。そして、一人っ子ゆえの自分だけの時間を、専ら本を読んで過ごすことで埋めていた。

「ほとんど活字とNHKの番組で人格形成されてるんじゃないかな。小学6年生の時には少年少女向けの《シャーロック・ホームズ》シリーズや江戸川乱歩作品なんかも全部読んだ。中学になって横溝正史を読んだら、こっちの方が面白い!ってなったり、そういう積み重ねでミステリー作品は常に読んだり観たりしてましたね」。

はせさんが創る舞台にはそうした下地の蓄積が色濃く反映されつつも、単なる謎解きに終始するわけでもなければ、これ見よがしの派手な展開や演出があるわけでもない。日常と非日常の間で^{あわい}浮かび上がる不思議な現象や謎を絡めながら、あくまでも重点を置くのは人と人との関わりとそこから生まれる会話で、終幕までそれが淡々と描かれていくことが多い。全ては明確には明かされず、よく注意していないと聞き流してしまいそうな何気ないセリフの中に、数々の伏線やヒントが緻密に組み込まれているのだ。

そこには、自らの頭で推理し、登場人物たちの心を読み、事の顛末を想像することを享受してきたはせさん自身の“物語の楽しみ方”が集約されている。それを観客に提示し、リアルタイムで共有する面白さを見出してしまったことが、嫌いだったはずの演劇を今なお続けている原動力となっているのかもしれない。



ご両親の愛情を一身に受けながら育まれていたことが伺える、3歳当時のはせさん

役者としての出発点!? 幼稚園のお遊戯会で《こぶとり爺さん》の主役に

初期作から一変した作風の変遷

こうした「はせ作品」の特色は、長年の試行錯誤によって構築されてきたものに他ならないが、戯曲を書き始めた当初の作風は、今からは想像できない歌やダンスも取り入れたポップなテイストのものだったようだ。

はせさんが演劇に関わり始めた'80年代は、空前の“小劇場演劇ブーム”が巻き起こった時代。'60年代の“アングラ演劇”を牽引した唐十郎や寺山修司、鈴木忠志、別役実ら第一世代に続き、つかこうへいら第二世代、そして野田秀樹や鴻上尚史、如月小春ら第三世代が活躍し、エンターテインメント性の高い作品が多く生み出されていた頃だ。アルバイトで費用を貯めては足繁く東京の劇場へと通っていたはせさんも、それらの作品から少なからず影響を受けていた。

「仲間内でも好みはいろいろ分かれて、僕は〈劇団青い鳥〉派でした。『俺は第三舞台』、『私はエロチカ』とか言い合っ、なぜ好きかを語らいつつ各々の演劇感が育っていく。当時はまだ戯曲塾や演劇のワークショップも無かったから、とにかく生の芝居を観るしかない、って感じですね。それで、いろんな方法論に触れながら、いよいよジャブジャブになってからは、基本的に僕が全部書くようになった。でもいろいろ観過ぎたせいか、逆に『やっぱり演劇だから時々ダンスしなきゃな』とか『最後はバックサス(客席に向かって照明を当て逆光状態にする)入れなきゃ終われないのかな』なんてね(笑)。自分なりに『オリジナルを書こう』と思いつつ、つい当時の演劇の既成概念に囚われていたのかもしれないですね」。

やがて、必要に迫られ演出も手掛けるようになったはせさんは、演劇嫌いだった原点に立ち返る。

「なんで役者が急に客席に向かって喋りだすのかとか、なんでもっと舞台上に立ってる人を大事にしないんだろうとか、いろんな疑問を抱くようになって、演出もやるようになったらやっぱり嫌なことは出来ないな、と。今東京で流行ってる芝居のスタイルと自分が思う感覚との齟齬だったり、いろいろな葛藤があった時代だと思うんですね。そこからだんだん、“静かな演劇”みたいなことになっていった感じです」。

“静かな演劇”と括られることへの想い

’90年代小劇場演劇の潮流として、当時の演劇評論家らによってカテゴライズされた“静かな演劇”とは、平田オリザの舞台に代表される、日常の話し言葉を用いた抑制した演技による演劇のこと。この頃、はせさんの作品もよくそう評されていたが、ひと括りで語られることには戸惑いを感じていたという。

「“静かな演劇”みたいなことって、僕は全国で同時多発的に生まれたものだと思うんですね。例えば、青森の〈弘前劇場〉や北九州の〈飛ぶ劇場〉とか。そういうことが言われ出す2~3年前くらいから僕も、『必然のない前掛け台詞はやめよう』とか、『都合のいい一人ゼリフはやめよう』と思って書いていたし、『関係性をもっと大事に描こう』とか、『なるべくワンシチュエーションでいこう』とか考える劇作家が同時多発で出てきた、ということなんだと思う。とはいえ平田さんがやってる演劇、僕がやってる演劇、〈弘前劇場〉の長谷川孝治さんがやってた演劇は、似たように見えても全然違う。本人同士にはよくわかるんだけど、みたいな。でも平田さんの芝居を観て、『ああ、これでいいんだよな』とGOサインをもらったような気がして、大きな励みにはなりました。だって、日常では誰かと誰かが同時に喋ることもありますよね。それまでの演劇の常識自体を笑いながら遊ぶというか、そういうことがほんとにいろいろ楽しくて。とにかくシチュエーションを一つに絞ること、登場人物を一番大事にすること、お客さんへのサービスというのは決して客席に向かって役者が何かを喋ることじゃない、みたいな大きなルール。そういうことに気づけたことは、これまで演劇を続けてこられた大きな出会いだったと思いますね」。

自身が納得する芝居の創り方、自分たちならではの演劇との向き合い方を掴んでいったはせさんとジャブジャブは、それ以前から取り組んでいた繊細な会話研究も武器に、次々と秀作を生み出していく。力量を認められ東京の劇場へも進出するようになると、’93年に《永遠の源さん》で池袋演劇祭優秀賞を受賞、翌’94年には《図書館奇譚》名古屋公演で集客1,000人を突破。さらに’95年の《まんどらごら異聞》東京公演でシアターグリーン賞を受賞し、’97年

にも《非常怪談》で同賞を受賞。この年には大阪進出も。そして翌’98年から、名古屋・東京・大阪の3都市公演をスタートさせたのだ。

こうした’90年代以降の大躍進によって演劇界での評価や注目度が高まる中、はせさんは’99年に《ダブルフェイク》、2004年に《サイコの晩餐》、’06年に《歪みたがる隊列》と、3度にわたる岸田國士戯曲賞最終候補ノミネートも果たしている。



シアターグリーン賞、松原・若尾演劇賞を受賞した《非常怪談》の初演



岸田國士戯曲賞最終選考に残った《歪みたがる隊列》

岐阜の劇団であり続けるということ

話は少し前後するが、劇団が名古屋へ進出してある程度集客できるようになると、はせさんは東京進出を目論んだ。

「名古屋に出てきた時と同じで、僕らがやってる演劇が東京ではなんぼのもんなのかを知りたい。ひょっとしたらもっと良いことがあるんじゃないかとか、劇団ごと買い取ってくれるような凄い人がいるんじゃないか、とか思って(笑)。

そんな夢を抱きながら東京公演を実現すべく、2泊3日で上京して劇場を巡った結果、ちゃんと話を聞いてくれた「こまばアゴラ劇場」(’24年閉館)と、旧「シアターグリーン」(’05年に建て替えリニューアル)で翌’91年から上演が決まる。

「夏はシアターグリーン、冬はアゴラ劇場に年2回、必ず新作で行くっていうハードなことをしばらくやってみましたね。最初の頃は劇団員も『売れるといいな』とか言ってた

んですけど、みんなだんだん疲れてきちゃって。公演することに疲れるんじゃないくて、『移動の時に、あんな満員電車には乗るべきじゃない』とか（笑）。終演後にお客さんを招いて飲んででも、メディアが近すぎることで芝居の話より情報交換がメインになっているな、と感じたり。地方で活動するメリットっていろいろありますけど、劇団やアーティストにとって一番のメリットは、メディアから距離があることじゃないかな、と思うようになりました。ゆっくり作品創りができる環境で贅沢に時間を使って、自信のあるものを創って東京に持って行って観せてやる、って（笑）。そういう想いは東京公演を始めて5~6年で固まっていきました。自分たちはこういうスタイルでいこう、と」。

約30年に及んだツアー公演がもたらしたもの

これまで長年にわたって続けてきたツアー公演は、自分たちの創作環境のありがたみを再認識する気づきを与えてくれたことなど、その経験から得られたものは非常に大きかったという。

「ツアー先では劇場で宿泊させてもらっていたので、合宿なんですよ。芝居が終わって『お疲れ様でしたー』と言っても、『さて、今日はゴミ当番だれ？』みたいな生活を一緒にしていると、個人の癖とか考え方とか、生活の価値判断が全然違って面白いんですよ。『お前、そこに歯ブラシ置く？』みたいなことで時々揉めるんだけど、明日も同じ舞台に立たなくちゃいけないじゃないですか。もうだんだんね、『アイツはああいうヤツだからな』って、みんなの心が寛容になっていく（笑）。ツアー公演をしたことで、集団として強くなったと思うんですよ。あと、ウチは会社員とか準社員がいるので平日に休める日なんてあまりないんです。公演日は土日を中心だけど、仕込みは平日からだから何日か会社を休みますよね。そうするとその月はもう休めない。この前の公演でいうと、12月が三重公演で、1月に東京公演、2月に大阪公演、というのがウチのスタイル。そうすると次の公演までの間はそれぞれ家庭や仕事に戻って全然違う意識で生活して、それで次の稽古が始まると、役者がものすごく良くなってますよ（笑）。肩の力が抜けてて、連続して芝居してきた相手の記憶じゃなくて、今言われたことに『あ、それはね』って喋り出す、その感覚が無茶苦茶いい感じなんです。今回の2月の大阪公演は本当にいい会話をしました。ウチのような方法論だからこそ生まれるものがある、というのは2000年代以降、毎回実感していましたね」。

これからはせひろいちとジャブジャブ

「『夜の横顔』でツアー公演はひと区切りしたわけですが、やっぱり劇団解散にした方がいいんじゃない？ とか、

ひょっとしたら途中で心が変わるかなと思ってたんですけど、なんだかんだ言ってとても楽しかったんですね。創ってる時にも「楽しさ」と「自由さ」、身近でこの両方があるのは芝居の他に無いな、とも思いました。この作品はある意味集大成として創ったこともあって、いろいろ詰め込んだりもしたんですけど、『あれって、あの芝居のあのセリフですよ？』とか気づいてくれるお客さんがいっぱいいて。それはちょっと嬉しかったです。今回の出来は僕も満足してるし、最新作が一番楽しく思えるというのは良い環境で、良いひと区切りのつけ方が出来たな、と思ってます。とにかく次のステージがあることは間違いないし、放っておいても書きたいことや、やりたいことはまた生まれてくるという確信もあるので、しばらくは自分をほったらかしておこうと思ってます」。

そしてはせさんには言うまでもなく、長年にわたり苦楽を共にしてきた古参メンバーから、瑞々しい感性を持った若手まで、確かな力量と豊かな個性で作品世界を体現する頼もしい同志たちがいる。しばしの充電の後、彼らとの協働によって次はどのような作品を生み出し、私たち観客を堪能させてくれるのか、その時を楽しみに待ちたい。



ツアー公演ファイナルとなった、第64回公演《夜の横顔》



ツアー最終のウイングフィールドで、終演後の記念撮影

独創性豊かな演奏家たち

名古屋市は音楽活動が大変盛んな都市である。演奏家人口が多く、毎日のようにどこかでコンサートが開かれている。その中でも特に独創的な取り組みをしている若手、中堅の演奏家に焦点を当て、名古屋市とその周辺地域の音楽界の一コマを覗いてみようと思う。

(まとめ：小塚憲二)

命をうたうトランペッター大和

トランペットのソリストとして活躍中の大和（本名：嶺元大和）さんは、九州の大学を卒業後、名古屋市にやって来て、主にオーケストラ奏者として演奏を続けていたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い仕事が激減。それを機に、自作の曲を中心にソリストとして活動していこうと思いついた。作曲には欠かせないジャズ理論を学んでさまざまなジャンルの音楽を習得し、2022年にはカフェでのライブを開始した。そして瞬く間に多くのファンを獲得し、年に数回のホール公演を実現するに至った。



トランペッター大和さん

大和さんの音楽はひとつのジャンルに収まるものではなく、聴き手に勇気と希望を与えてくれる曲や、日本的で味わい深い曲など多種多様である。ご自身の言葉をそのまま引用しよう。

「僕の音楽のテーマは『命をうたう』ことです。トランペットの音を通して、人の心や記憶、祈りに寄り添えるような作品づくりを目指しています。単に音を届けるのではなく、『生きること』そのものを感じてもらえるような表現を模索しています」。

飲食店を舞台に

ホール公演と並行して、カフェや飲食店でのライブも続けている。福岡県出身の大和さんは、名古屋の喫茶店文化に深く関心を寄せていて、東海地方の飲食店を舞台に音楽と飲食を融合させ、魅力的な街づくりに貢献する企画「YAMATO ONE-UP PROJECT」を立ち上げた。当初、店側の反応は芳しくなかったが、飛び込み営業を続けるうちに多くの賛同が得られるようになり、今では年に10回ものライブを行う店もあるという。新聞やテレビにも取り上げられ、注目を集めつつあり、ゆくゆくは若い世代にも引き継いでいきたいと考えているようだ。

そして2026年3月、念願だった愛知県芸術劇場コンサートホールでの自作公演を実現する。オーケストラ団員としてこの舞台に立つことは度々あったが、ソリストとしては

初めて。クラウドファンディングなどで多額の費用を用意し、学生や若い音楽家は入場無料にするなどして、多くの観客を集めることができた。これまではピアノとドラムとの3人で演奏することが多かったが、この公演ではそれらに加え、弦楽器とフルート、そして和太鼓も登場させた。豊かな音量と多彩なサウンドに観客は酔いしれ、大盛況のうちに幕を閉じた。ソリストデビューから5年目、大和さんの挑戦はまだまだ続きそうだ。



一つの夢を名古屋の光へー「愛を知る。」
(2026年3月22日、愛知県芸術劇場コンサートホール)

二刀流ピアニスト・金沢あきな

クラシックもジャズも弾きこなすピアニストの金沢あきなさんは、大学院を修了後、フランスに留学。最初の5年はクラシックピアノを、その後は別の学校で4年間ジャズを学んだ。ジャズの授業では、楽譜を取り上げられ、楽曲を耳で聴いて分析するなど、初めて体験する課題に困惑することもあったという。それでも長期間の留学生活でクラシックとジャズのスキル



金沢あきなさん

をしっかりと身につけ、帰国。ソロリサイタルをはじめ、さまざまな楽器プレイヤーの伴奏や、ベースとドラムを伴ったジャズピアノトリオのセッションなど、活躍の場は多岐に渡っている。先に紹介した大和さんとも専属の伴奏者として何度も共演し、自作の曲や自らジャズアレンジした曲も多数披露している。ジャンルを超えて演奏する際に気を付けていることを尋ねてみた。

「例えばクラシックとジャズとでは、リズムの取り方や音の出し方が違います。自分のベースにあるクラシックとの共通点や相違点も含め、それぞれのジャンルの歴史からメンタリティに至るまでを注意深く洞察しながら、その都度求められる音楽に臨機応変に染まれるよう心掛けています」。

研究の成果を出版

「今後は特にジャズアレンジに多く取り組んでいきたい」と話す金沢さん。ジャズの演奏は基本的にアドリブで、楽譜に細かい音符が書かれている訳ではない。それでも長年クラシックと共に歩んできた金沢さんにとって、楽譜はかけがいのないものである。そこで学生の頃に出会ったカプースチンの曲に再び注目した。カプースチンは1937年生まれ、ロシアのピアニスト兼作曲家で、多くのジャズ作品を楽譜として残している。金沢さんはその中の1曲を研究し、2026年の3月に『カプースチン「変奏曲作品41」の分析と演奏への提案』を出版した。副題は～ジャズとクラシックの融合?!～と付けているが、楽譜で書かれたジャズ作品の解説や演奏方法が、多くの譜例とともに詳しくまとめられている。この本はピアニストだけでなく、あらゆる楽器のプレイヤーにとって大きな指針となるかもしれない。ポップス全盛の今日、クラシックの演奏家にも幅広いジャンルの曲の演奏が求められるだろうし、曲によってはアドリブが必要となることもあるだろう。特に若い演奏家たちにお薦めしたい一冊である。



『カプースチン「変奏曲 作品41」の分析と演奏への提案～ジャズとクラシックの融合?!～』金沢あきな（リール出版）

数多の楽器を操る『フライングドクター』

最後に、ユニークな活動をしている演奏家ユニットを紹介しよう。「自家用機に乗って遠隔地へ行き治療をする医者」という意味の熟語から「フライングドクター」と名付けたこの女性ユニットは、2009年に結成。2025年9月からは宇野伊世さん、石田千尋さんの2人を中心に、3人のサポートメンバーを加えた新体制で演奏活動を続けている。



フライングドクターのメンバー
（上段：宇野伊世さん、石田千尋さん、
下段：小林真裕美さん、かとうめいさん、
岩田ゆいこさん）

最大で30台ほどの楽器を持ち替えながら演奏する、変化に富んだ色彩豊かなサウンドを強みにしている。扱う楽器はピアノ、ヴァイオリン、バスクラリネット、ウクレレ、トイピアノ、そして複数の鍵盤ハーモニカとパーカッション。これらを何度も持ち替え、時には1人2つ以上の楽器を同時に演奏したりする。そのパフォーマンスは何度見ても興味をそそられる。

豊田市にある「野田味噌商店 蔵の杜」という味噌蔵でのライブが始まりだったそうで、その後ライブハウス、小劇場、ホールでの公演と展開していった。12年前よりYouTubeを定期的に配信しており、現在に至るまで膨大な数の動画をアップしている。これまでに7枚のCDをリリースするなど、その精力的な活動は地元のマスコミにも注目され、テレビやラジオへの出演も多い。



野田味噌商店 蔵の杜にて（2009年）

レパートリーは、クラシック、ポップス、アニメソングなど、幅広い年代の人々にとってなじみ深い曲のほか、メンバーのオリジナル曲も披露している。使用する楽器に相応しいアレンジを自分たちで行っているが、特にクラシック作品は興味深い。原曲通りではなく、テンポ、リズム、拍子、和音などに変化を加え、アドリブを含む乗りのある演奏で、とても親しみやすい楽曲へと変容させていて、メンバーは「ポップクラシック」と呼んでいる。その想いをメンバーの宇野さんに聞いてみた。

「自分たちの音楽に出逢った人たちを元気にしたい、幸せにしたいという想いで活動しています。単にウケを狙うのではなく、私たち独自の表現を大事にしたいと考えています」。

2025年8月に電気文化会館ザ・コンサートホールで15周年記念リサイタルを開催。バロックから20世紀までのクラシック音楽を色とりどりの楽器で演奏し、満員の観客は大喜びで、大変な熱気に包まれていた。今後の活躍も大いに期待される演奏家ユニットである。

今後の展望

今回取材した演奏家たちにはいくつかの共通点があった。いずれもクラシック音楽をスタートとしながらも、ジャンルの壁を軽々と飛び越え、観客に寄り添い、エンターテインメントの担い手たらんとしている。彼らの演奏に聴衆は喝采を以て応え、舞台と客席が一体化した空間が現出されていた。これらのように、市民が生演奏に触れる機会がもっと増えれば、名古屋は音楽に溢れる街として、より一層活気に満ちることだろう。

#zoom up

ズーム・アップ

歌人

こざかい だいすけ 小坂井大輔さん

短歌と出会って新しい人生が始まった

小坂井大輔さんは、唯一無二の作風で人気を集める歌人であり、名古屋・駅西エリアの中華料理店「平和園」の二代目です。創業52年の店は近年、「短歌の聖地」と呼ばれるようになり、夜な夜なレジェンドから若手まで、歌人たちがひっそりと集まるとか、いないとか。短歌ブームの今、歌会以外で語り合える場の存在は、若い世代にとって大きな意味を持ちます。名古屋の短歌文化を支える小坂井さんに話を伺いました。

(聞き手：黒田杏子)



生まれも育ちも中村区

生まれてからずっと名古屋市中村区です。明るくて活発な子どもだったけど、照れ屋で、結構周りを見ていたなっていう気はする。父が平和園を開いたのは僕が生まれる前のことで、子どもの頃は店でうろちょろして、常連さんからお小遣いをもらったり、たまに手伝いをしたりしてましたね。今思い出してみても、変な人たちがいっぱいいたな。ずっと酔っ払ってる人とか、突然コップをかみ砕いちゃう人とか、瓶ビールを口で開ける人とか。何を見せられてるのが分かんない。うちの母親に「ママさん、これプレゼント」って、向かいのブティックの服を勝手に持ってきたり。無茶苦茶ですよ。

本はまったく読んでなかった。ファミコンをやったり、外で野球をしたりしていたかな。高校を卒業してからはギャンブル三昧。入学した大学にも行かず、毎日スロットとパチンコをやっていた。深夜3時から開店待ちして、22時頃までずっとパチンコ台の前に座ってる。結構な労働時間。ある程度稼ぎもあったので就職もしなかったんだけど、23歳ぐらいの時に平和園の従業員がいなくなって、急遽、店を手伝うことになった。当時は、今が未来につながっていくって感覚がなかった。夢はスーパーマンか仮面ライダー。子どもの頃のままで、現実的にこうなりたっていうのはまったくなかったですね。



(左) 創業当時の平和園の様子が生かされるポスター
(右) 平和園の看板

俺は絶対すごいことになる

30歳になった時、それまでの人生の中身のなさに衝撃を受けて、突然、雷に打たれたように「本を読もう」と思った。でも何を読めばいいのかまったく分からないから、勢いで「朝活読書会」を始めました。毎週水曜日の朝7時に名古屋駅のカフェで集まって、好きな本をシェアしてもらう。6年ぐらいやっていたかな。シェアされた本は全部読むって決めていたから、当時は月に30冊ぐらい読んでましたね。なぜか文学好きが多くて、塚本邦雄さんや岡井隆さんの歌集を持ってきた人も。ある日、戸田響子さんが雑誌『ダ・ヴィンチ』を持ってきました。戸田さんの応募した短歌が、『ダ・ヴィンチ』で連載中の穂村弘さんの「短歌ください」のコーナーに選ばれて掲載されていたんです。その時に掲載されていた他の短歌も、それまでのイメージと違った作品が多くて、「面白い！俺もやる！」って。また雷に打たれました(笑)。



朝活読書会にて

短歌と出会って、これで俺は何かを表現できる人になれるって確信した。それまでは、日常のなかで「面白い」と思う出来事やシーンがあっても、翌日には忘れてしまっていた。でもこういう感覚も、短歌でなら形にできる。俺の出番だ、と。始めてひと月もたたないうちに「俺は絶対すごいことになるよ」って言うていたから、みんなびっくりしたと思う。実際、すぐに「短歌ください」に選ばれました。

わからないわからないけど顔らへん

納豆の糸顔らへんふわり

『平和園に帰ろうよ』（書肆侃侃房）

そこからはもう、自分の直感力をフルに使い出した。加藤治郎さんの講座に行き、穂村さんが所属している「歌人集団かばんの会」と、加藤治郎さんが選者を務める「未来短歌会」に入会して、荻原裕幸さんが主宰する「東桜歌会」に行くようになって。当時は「短歌ください」以外にも日経歌壇などの新聞に投稿しまくっていて、そこにはいつも岡野大嗣さんや木下龍也さんがいて、「この人たちに勝たなきゃダメだ」って思ってやっていた。その頃の切磋琢磨が、自分を育ててくれたと思います。

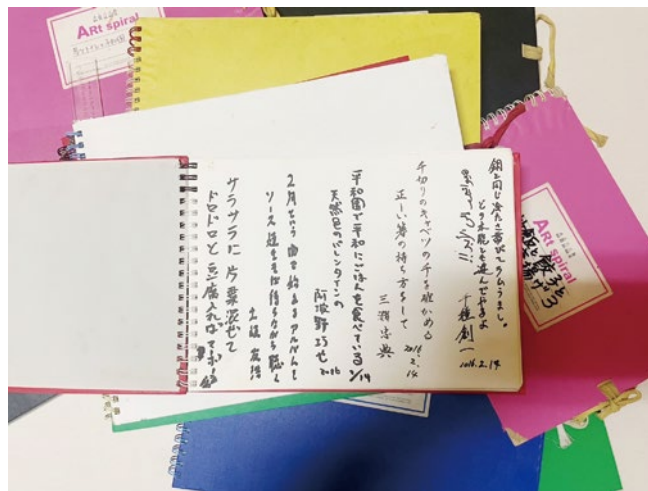
駅西エリアを舞台にした短歌

最初から「ここ」で見てきたものや、感じたことで短歌を詠んできた。それしかなかった。当時、自分の30年のなかに、短歌にしたいことがたくさんあった。何もないと思っていただけ、無駄じゃなかったんだよね。それどころか、短歌界にはこういう生活をしてきた人はいないから、ブルーオーシャンだと思った。町田康さんの小説やコーエン兄弟の映画には、ダメ人間がたくさん出てくるけど、どこか愛らしくて憎めない。自分もダメ人間ばかり見てたし、ちょっと憧れていた部分もある。俺は、短歌でそれをやりたかった。もちろんHIPHOPのレペゼン文化も入ってたし、コンプレックスも含めて「対・東京」は意識してた。この場所が誇りだった。今、駅西エリアが大きく変わってきているのには、やっぱり寂しさはあるよ。みんな路上で寝てたし、ゲロだらけだし、最悪。でもここが好きだった。朝、ポン引きの人たちに挨拶しながら登校したり、夜、遊びに出ると「早く帰って来いよ」と声をかけられたり。そういうのが楽しかった。街としては成熟して、いい街にはなっていってると思いますけどね。

「短歌の聖地」へ

だんだん歌人の知り合いも増えて、「中華料理屋やってます」って言うと、面白がって来てくれるようになって。「短歌の聖地」っていうのは荻原さんが言い出したんだよね。最初は多分、冗談まじりだったと思うんだけど、それがSNSで徐々に広がっていった。2017年に荻原さんが「誰かが平和園で待つる」という連作を発表して、翌年『短歌研究』で「平和園の謎」特集が組まれて。その後、新聞やテレビでも取り上げられるようになった。でも、僕自身は一切タッチしてこなかった。「短歌の聖地」って聞いて来たのに、普通の中華料理屋じゃん、っていうのでいい。「短歌チャーハン」とかやったら？」って言われるけど、それはダサいからやらない。この距離感を大事にしてる。

短歌をやっている人にはノートを渡して、その場で一首書いてもらっている。2016年に千種創一さんの歌集『砂丘律』の批評会の打ち上げで、「みんなに一首書いてもらおうよ」ってノートを持ってきてくれた人がいて、それが始まり。今では11冊目になりました。最近では、歌人じゃない人も書いてくれるようになってきたのが嬉しい。あれはいずれ、僕の手からは離れるものだと思うている。歌人交友録としても貴重だし、みんなその場で直筆で書いてくれているから。



平和園の短歌ノート『炒飯と餃子と唐揚げ』

肩書はいらない

歌人のなかには、自分ではなく短歌を見てほしいっていう人が多い。俺は今、逆に自分自身を前に出していると思っている。「俺」を入りに短歌を知ってもらえることもできるかもしれないし、それが短歌への貢献になるんじゃないかって思ってる。今は休止しているけど、ここ半年はTikTok配信を毎日やっていた。本の話とか音楽の話とか、雑談するだけ。キャバ嬢からの悩み相談もやってたよ。極端なことを言えば、歌人っていう肩書きも、中華料理屋っていう肩書きもいらない。そうじゃないと自由にできない。起きて本を読んで、映画を見て、仕事前に風呂に行ってサウナに入って。来週からは書道教室に通おうと思ってる。今はストレスもないし、幸せですよ。



歌人・岡野大嗣さんとのトークイベント

歌集『平和園に帰ろうよ』（書肆侃侃房・2019）、
『コザカイズム』（短歌研究社・2025）



「なごや文化情報デジタルブック」スタートしました!

名古屋の文化芸術を定期的に紹介する専門誌「なごや文化情報」が、紙の冊子に加えてデジタル版でもご覧いただけるようになりました。気になる記事を検索したり、近年のバックナンバーを読み返したりと、スマートフォンで便利にお楽しみいただけます。もちろん無料ですので、ぜひ一度チェックしてみてください!

なごやの文化

ひと・こと・いまを届ける



「なごや文化情報デジタルブック」はこちら



なごや文化は寄附でもつ



名古屋市文化基金

支援・育成事業

市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成

参加・体験事業

市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施

鑑賞事業

優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供

市民文化の情報発信

情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信

皆さまからいただいた**寄附金**を活用し、**なごや文化創造のための様々な事業を展開**しています!

名古屋市文化基金の
詳細および
寄附のお申込みは
こちら



ご寄附に関する
お問い合わせ

名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL 052-249-9390

デザインを通して、
企業様とお客様を結ぶ

EIGHT DIGITAL WORKS

- グラフィックデザイン
パンフレット・カタログ・
チラシ・POP 他
- WEB デザイン
WordPress や Wix 等での
制作に対応
- 一般印刷・オンデマンド印刷
DTP データ・Office データの印刷等
- 言語翻訳 (特殊言語対応)
WEB や POP、
海外向けマニュアルの翻訳等

株式会社 エイトデジタルワークス
〒453-0014 愛知県名古屋市中村区則武1-9-9
側島第2ノリタケビル4F
Tel. 052-452-5258(代) Fax. 052-452-5267
<https://www.eight-dw.com/>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エアアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中村区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響 / 映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ

マネっぴ

〒461-0004 名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL:(052)508-5095 FAX:(052)508-5097 Web:www.mane-pro.com E-mail:mane-pro@mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM 等にて配布